

# 新勅撰和歌集における夏部の構成と特質

岩 崎 禮 太 郎

春のかたみ(霞) 思慕、遠望の緑

## 二

新勅撰和歌集<sup>(1)</sup>夏部(巻第三)の歌を、配列順に主題によって分類すると、次のとおりである。(数字は歌の数)

春のかたみ(霞) 思慕 1 待時鳥 2 夏衣 1 葵 3 時鳥 6 あやめ 2 遠望の緑 1 時鳥 11 五月雨 8 時鳥 8 夕立 1 螢 3 夏月 3 ひぐらし 1 納涼 2 六月被 3 (計 56 首)

これを八代集における夏部の歌の主題配列<sup>(2)</sup>一覧に比べると、次の相違が明らかとなる。

- (一) 新古今集にあつて新勅撰集にない主題。夏草(後拾遺 1、千載 1、新古今 5) 山畦の早苗(後拾遺 2、新古今 1) 橘(古今 1、後撰 1、後拾遺 2、金葉 2、詞花 2、千載 6、新古今 10) 緑樹(拾遺 2、新古今 2) 鵜河(金葉 1、千載 1、新古今 4) 竹風(新古今 2) 撫子(後撰 7、拾遺 1、詞花 2、千載 2、新古今 1) 夕顔(新古今 1) 夏の荻(新古今 2)
- (二) 八代集のいずれにもなくて新勅撰集にある主題

新勅撰和歌集における夏部の構成と特質

この新勅撰和歌集(以下「新勅撰集」と略称する)における夏歌の構成と特質とについて、次に(1)から(7)までの項目に分けて考察することとする。

(1) 四季の歌における夏歌の比率

八代集および新勅撰集における四季の歌の数とその比率とを表にまとめると、「第1表」になる。春夏秋冬の歌の中で数の多いものからの順序は、古今集から詞花集までは1秋2春3夏4冬であったが、千載集で逆転して冬の歌が夏の歌より一首多くなり、新古今集では冬の歌がかなり上回っている。新勅撰集においても新古今集と同じく秋、春、冬、夏の順であるが、新古今集よりも春の比率が多くなり、冬・夏の歌の比率が減っている。

(2) 中心主題、<sup>ほととぎす</sup>時鳥の歌の配列

新勅撰集における全体の歌数は一三七四首であり、新古今集の一九七九首に比して約六九パーセントに当たる。そうして、夏の

〔第1表〕（拾遺集の雑春・雑秋は含まない）

	四季の	春	夏	秋	冬
	総歌数	歌数(%)	歌数(%)	歌数(%)	歌数(%)
古今	342	134(39)	34(10)	145(42)	29(8)
後撰	507	146(29)	70(14)	226(45)	65(13)
拾遺	262	78(30)	58(22)	78(30)	48(18)
後拾遺	424	164(39)	70(17)	142(33)	48(11)
金葉	325	98(30)	66(20)	109(34)	52(16)
詞花	158	50(32)	31(19)	58(37)	21(13)
千載	475	135(28)	89(19)	161(34)	90(19)
新古今	706	175(25)	110(16)	266(38)	156(22)
新勅撰	442	136(31)	56(13)	169(38)	81(18)

歌の五六首は新古今集の一〇首の五一パーセントに当たる。この規模の縮小という企画に基づき、効果的な構成を考えた定家は夏の歌の中心主題をまず「時鳥」に置き、次に「五月雨」に置いたと考えられる。この「時鳥」と「五月雨」との二つの主題の歌の入集状況を八代集におけるそれと比較して、第2表・第3表にまとめた。この第2表・第3表ならびに一の冒頭に掲げた新勅撰集の歌の主題別分類表を見ると、次のことがわかる。新勅撰集の夏部の中心主題としての「時鳥」の歌の夏部における比率は

〔第2表〕

	(A)夏の歌の数	(B)時鳥の歌の数	B/A
古今	34	28	82%
後撰	70	26	37%
拾遺	58	27	47%
後拾遺	70	26	37%
金葉	66	25	38%
詞花	31	8	26%
千載	89	26	29%
新古今	110	33	30%
新勅撰	56	27	48%

〔第3表〕

	(A)夏の歌の数	(B)五月雨の歌の数	B/A
古今	34	0	0
後撰	70	2	3%
拾遺	58	0	0
後拾遺	70	4	6%
金葉	66	6	9%
詞花	31	4	13%
千載	89	11	12%
新古今	110	12	11%
新勅撰	56	8	14%

古今集について第二位に大きく、同じく「五月雨」の歌の比率は八代集のどの集よりも大きいのである。

さて、新勅撰集における夏部の中心主題である「時鳥」の歌の構成に目を向けてみよう。この集における「時鳥」の歌の配列を見る

と、一の冒頭に記したように、四か所に分けて置かれている。

ところで、「時鳥」の歌の配列の方法を八代集について見ると、最も多く分散して配列した集は後撰集であって、九か所に分散して置かれている。この後撰集は、全般的に歌序に混乱があり、「藝の歌の集成」という性格をもっているので、特別と見なすべきである。後撰集を除くと、分散配置が四か所になされているのが拾遺集、三か所になされているのが古今集、二か所になされているのが後拾遺集、千載集（この集においては、時鳥20、あやめ3、橘6、五月雨11、時鳥6の順に分散配置されている）、新古今集（この集においては、時鳥32、あやめ4、田のしめ縄1、五月雨12、橘10、閏五月郭公1の順に分散配置されている）である。そうして、金葉集（時鳥25首）と詞花集（時鳥8首）とは、それぞれ「あやめ」の直前に一か所にまとめて置かれている。

八代集における「時鳥」の歌においては、時鳥をめぐる情景や人間の心理の種々相が詠まれている。そもそも「時鳥」を詠んだ歌は、時鳥を待つ歌から最盛期における時鳥の歌を経て、盛りを過ぎた時鳥の歌に至るまで、時期的にもかなりの幅をもった主題であると考えられる。しかしながら、「時鳥の声を待つ歌」は後撰集を除いて他のすべての集に採られているが、最盛期における「時鳥のしきりに鳴く」風情を詠んだ歌は、古今集に三首、

(150) あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねをのみぞなく（よみ人しらず）

(158) 夏やまにこひしき人やいりにけむこゑふりたててなくほととぎす（紀秋岑）

### 新勅撰和歌集における夏部の構成と特質

(160) さみだれのそらもとどろに郭公なにをうしとかよただなくらむ（貫之）

後撰集に三首、

(156) なきわびぬいづちかゆかむほととぎすなほうのはなのかけははなれじ（よみ人しらず）

(163) このころはさみだれちかみほととぎすおもひみだれてなかぬ日ぞなき（よみ人しらず）

(175) をりはへてねをのみぞなく郭公しげきなげきの枝ごとにて（よみ人しらず）

拾遺集に二首、

(120) ほととぎすいたくななきそひとりゐていのねられぬにきけばくるしも（大伴坂上郎女）

(123) 夏くればふか草山のほととぎすなくこゑしげくなりまさるかな（よみ人しらず）

後拾遺集に二首、

(202) またぬよもまつ夜もききつ子規花たちばなのにはふあたりは（大貳三位）

(203) ねてのみや人はまつらむほととぎす物おもふやどはきかぬ夜ぞなき（小弁）

があるだけであって、金葉・詞花・千載・新古今の各集には見えない。また、「盛りを過ぎた時鳥」の歌は、後撰集に二首、

(180) とこなつになきてもへなむ郭公しげきみやまに何かへるらむ（よみ人しらず）

(208) 秋ちかみ夏はてゆけばほととぎすなくこゑかたきこちこ

すすれ(よみ人しらず)

が見える外には、千載集に「閏五月時鳥」(後出)の外に一首、

(189)をちかへりぬるともきなけ郭公いまいくかかはさみだれの

そら(資賢)

があり、新古今集に「閏五月時鳥」(後出)一首があるのみである。

さて、ここで、新勅撰集の前の勅撰集である新古今集の「時鳥の歌」に注目してみると、その大きな特徴は何であろうか。それは、

(202)雨そそく花たちばなに風過ぎて山ほととぎす雲に鳴くなり

(俊成)

の遠近二事を対にした連歌的な技巧をもち、しかも感覚的に清新な歌、それから、

(201)昔思ふ草のいほりの夜の雨に涙なそへそ山ほととぎす(俊成)

のしつとりとした抒情の歌、それから、

(209)有明のつれなく見えし月は出でぬ山郭公待つ夜ながらに

(良経)

(214)いかにせむ来ぬ夜あまたの時鳥待たじと思へば村雨の空

(家隆)

(215)声はして雲路にむせぶ郭公涙やそそく宵の村雨(式子内親王)

の、それぞれ巧緻な詞続きにより景物と人間の心情とを織りませ、耽美的で繊細な感じのする歌、——このような余情の豊かな歌の佳作が多いことであると言いうことができるであろう。

次に、本稿で問題にしているところの新勅撰集における時鳥の歌

に注目すると、その大きな特徴は、「時鳥を待つ歌」からはじめて

「最盛期の歌」「盛りを過ぎた歌」に至るまで、それぞれの時期の

特徴をよく表現した歌を配置して、時の推移をじゅうぶんうかが

うことのできる構成をとっていることである。前に指摘したように

時鳥の歌を四か所に分散配置されたのも、その意図に基づくものと考

えられる。その分散配置された四つの部分を、「時鳥Ⅰ」「時鳥Ⅱ

」「時鳥Ⅲ」「時鳥Ⅳ」と仮に名づけると、「時鳥Ⅰ」(138 139)

においては夏の初めにおける「時鳥を待つ」歌を置き、「時鳥Ⅱ

(144 149)には「里なれた時鳥」「一声では満足しない心」を詠ん

だ歌などを置き、「時鳥Ⅲ」(153 163)には「花たちばな」を詠み

入れた歌を三首置くとともに、

162ながき日のもりのしめなほくりかへしあかずかたらふほととき

すかな(為家)

という、最盛期のしきりに鳴く時鳥の特徴をはっきり表現した歌を

置いている。そうして、「時鳥Ⅳ」(172 179)においては、「さみ

だれ」を詠み込んだ歌、

172さみだれはあかでぞすぐるほととぎす夜深く鳴きしはつねばか

りに(相模)

173郭公さききつと思ふさみだれの雲のほかなるそらのひとこゑ

(慈円)

174ほととぎすきくともなしなあしびきの山ちにかへるあけぼのの

声(橋俊綱)

175たが里に待たできくらむほととぎすこよひばかりのさみだれの

声(源師賢)

の四首を置くとともに、

176ほととぎすいまいく夜をかちぎらむむおのがさ月のありあけのころ(良経)

177けふここに声をはつくせほととぎすおのがさ月ものこりやはある(祐盛法師)

と、「盛りを過ぎて終りに近い時鳥」に名残を惜しむ気持をじゆうぶんに尽くす配慮をしており、最終部分に「閏五月郭公」として、

堀阿院御時、ささいの宮にて、閏五月郭公といふころをよみ侍りける

178雲ちよりかへりもやらすほととぎすなほさみだるる空のけしきに 俊頼朝臣

179やよやまたきなげみそらの郭公さ月だにこそをちかへりつれの二首を置いている。ところで、この「閏五月郭公」の歌は、康和四年(一一〇二)閏五月十日に中宮御所で講ぜられたものである。

この時に講ぜられた「閏五月郭公」の歌で、勅撰集に採られている歌には、千載集に、

(193) さつきやみふたむら山の郭公みねつづきなく声をきくかな(俊忠)

(北村季吟の八代集抄に「五月閏二村山といふにて閏五月の心有。下旬はあきらかなり。五月閏二村山といふより峰つづきな

くと、詞つかひ首尾相応にや。」と注されている。)

があり、新古今集に、(248) ほととぎすさつきみな月わかかねてやすらふこそ空にき

新勅撰和歌集における夏部の構成と特質

こゆる(国信)

という、ほととぎすを擬人化した歌がある。このように千載集と新古今集においては、各一首しか置いていない「閏五月郭公」の歌を、新勅撰集においては二首ほど置いてある。その178と179の歌はじゆうぶんに情感のこもった歌であって、「盛りを過ぎて終りに近い時鳥」に名残を惜しむ気持を尽くしているのである。

(3) 古い主題の歌の割愛と新しい主題の歌の入集

右の(2)において述べたように、新勅撰集は新古今集に比べて歌数の規模を縮小するという企画に基づきながらも、他方においては、中心主題である「時鳥」と「五月雨」との歌の比率を新古今集よりはるかに大きくしている。そのような配慮をした裏面においては、一の(一)において指摘したように、新古今集における夏部の主題のいくつかを割愛しているのである。その割愛した主題を見ると、新古今集において、それまでの勅撰集におけるその主題の歌よりも多く採られ、かなりじゆうぶんな展開を見たところの、次のような主題が大部分を占めていることがわかる。(次の数字は、新古今集における歌数)

夏草 5 橘 10 鵜河 4

ただし、新勅撰集においては、「橘」を主題とした歌はないが、時鳥を主題とした歌に橘を詠み込んだものが三首、五月雨を主題とした歌に橘を詠み込んだ歌が一首ある。そのようなことをも考慮に入れながら、全体の規模を縮小したものと思われる。

次に、新しく入れられた主題の歌に、「春のかたみ(霞) 思慕」の歌、

題しらす

相 模

137 霞だに山ちにしばし立ちとまれすぎにし春のかたみとも見む  
と、「遠望の緑」の歌、

寛平御時きさいの宮の歌合歌

よみ人しらす

152 おしなべてさ月のそらを見わたせば水も草ばもみどりなりけり  
とがある。

右の137の歌は夏部の冒頭の歌として置かれている。ところで、いまここに八代集の夏部の冒頭の歌を並べてみる。

古今 わがやどの池の藤波さきにけり山ほととぎすいつかきなむ  
(よみ人しらす)

後撰 けふよりは夏のころもなりぬれどきる人さへはかはらざり  
りけり(よみ人しらす)

拾遺 なく声はまだきかねどもせみのはのうすき衣はたちぞきに  
ける(大中臣能宣)

後拾遺 さくらいろにそめし衣をぬぎかへて山ほととぎすけふよ  
りぞまつ(和泉式部)

金葉 われのみぞいそぎたたね夏ごろもひとへに春ををしむ身  
なれば(源師賢)

詞花 けふよりはたつ夏ごろもうすくともあつしとのみやおもひ  
わたらむ(増基法師)

千載 夏ごろも花のたもとにぬぎかへて春のかたみもとまらざり  
けり(匡房)

新古今 春すぎて夏来にけらし白妙のころもほすてふあまのかぐ  
やま(持統天皇)

右において、歌の主題は、古今では山郭公(藤)であり、後撰から千載までは更衣であり、新古今では夏衣である。それらに比して、新勅撰では新しい主題の歌を採り入れたことになる。その場合、「春のかたみ」ということについては、千載では更衣に関して「春のかたみもとまらざりけり」と静観しているのに対して、新勅撰では「霞」に対して「立ちとまれ」と強く求め、「春のかたみとも見む」と思慕の情を積極的に打ち出している、清新な感を与える、夏の巻の冒頭の歌になっている。

次に、152の「遠望の緑」を主題とする歌について考えるに、これまでの勅撰集において夏木立・青葉・夏草を詠んだ歌はあったが、このような「遠望の緑」の歌は初めてであって、この歌は広大な景を詠んだ大らかでさわやかな歌になっている。

以上のように、全体の規模の縮小という企画にもかかわらず、右の二つの新しい主題の歌を採り入れて、清新な感じを導入しているのである。

(4) 相反する風情の歌の並列

久安百首歌たてまつりける夏歌

大炊御門右大臣

158 おぼつかなたれそま山のほととぎすとふにならですぎぬなる  
かな

この歌は、「今鏡」の打聞に載せられているところの、宰相中将重通の「たれたれぞたれそま山のほととぎす」と女房の「うはの空にはいかが名のらむ」との贈答による連歌をふまえている。

文治六年女御入内屏風に

後徳大寺左大臣

161ほととぎす雲のうへよりかたらひてとはぬになるあけぼの  
そら

右の158と161との一対の歌は、相反する風情の歌を並列して、「時鳥」の歌の構成に変化を与えている。ところで、新勅撰の春部においては、このような例が七例あったが、夏部においては右の一例だけである。

(5) 本歌・先行歌のことばの逆用

家に五十首歌よみ侍けるに、江蟹

参議雅経

183なにはめがすくもたく火のふかき江にうへにもえてもゆくほた  
るかな

(先行歌) 千載、恋一、藤原清輔「難波めのすくもたく火の下こ  
がれ上はつれなき我身なりけり」

(右の183の歌は道助法親王家五十首和歌におけるものである。) 本歌・先行歌のことばの逆用が建保期において盛んになったことについては、既に小論において指摘したところであって、建保三年の「内大臣家百首」において家隆が九首の該当の歌を詠み、翌年の「後鳥羽院百首」においては定家は三首、家隆は四首の該当の歌を詠んでいる。このような、人の意表をつく作歌の方法がここにも現れている。

(6) 否定的表現の歌の効果的配置

右の(4)の158の歌は、否定的表現の歌が効果的に配置されたものであった。

それ以外において、否定的表現の歌二首、

郭公歌十首よみ侍けるに 法性寺入道前関白太政大臣

新勅撰和歌集における夏部の構成と特質

147よしさらばなかなでもやみねほととぎすきかずはひとまわするば  
かりに

関白左大臣家百首歌よみ侍けるに 藤原光俊朝臣

171さみだれの空にも月はゆくものを光みねばやしる人のなき  
に注目したい。

新勅撰集において、147の歌は、

145かみなびのいはせのほるとぎすならしのをかいつかき

なかも(田原天皇)の「ほととぎすの声を待つ歌」、

146ききてしもなほぞ待たるほととぎすなく一声にあかぬころ

は(祐子内親王家紀伊)

の「一声聞いただけでは満足せず次の声を待つ歌」の次に置かれている。この147の歌において、「よしさらばなかなでもやみね」と否定的な命令の形で強く表現しているのは、鳴き声をじゅうぶんに聞けないもどかしさの裏返しであり、ほととぎすを愛するあまりに発せられた叫びとも言ふべきものであって、この一群の郭公の歌の中における率直な感情の高まりにアクセントをつけており、効果的な構成を強く支えるはたらきをしている。

次に、171の歌は、「五月雨」を主題とする歌群の末尾に置かれた歌であって、内容としては大きく天文学的に考えた真理とも言うべきことを詠んだ異色の歌である。この歌は、貞永元年(一一三三)の「洞院摂政家百首(関白左大臣家百首)」から採られている。この百首の組織は一題五首、計二十題から成るのであって、この171の歌は光俊の詠んだ「五月雨」の歌五首<sup>(10)</sup>、  
さ月くるかつらき山はふもとまてたなく雲に雨はふりつつ

五月雨の空にも月はゆくものをひかりみねはやしる人のなき

おほあらしのもりのした草かりにたに人こそみえね五月雨のころ

けふいか末のまつ山五月雨に人もうらみぬ浪のこすらん

さみたれのはれまやみゆるなには人うらめつらしくも少しはくむな

り

の第二首である。この歌を除いた他の四首はそれぞれかなり具象的な情景とそれに伴う情感とを詠んでいるが、第二首のみが天文学的な思考ともいへべきものを詠んでいるのである。

また、この171の歌は、新勅撰集の「五月雨」を主題とした歌の中で「月」を詠み入れた唯一の歌である。ところで、新古今集において「五月雨」を主題とする歌で「月」を詠み入れている歌は、

(233) さみだれの雲の絶えまをながめつつ窓より西に月を待つかな (荒木田氏良)

(235) 五月雨の月はつれなきみ山よりひとりもいづる時鳥かな (定家)

(237) 五月雨の雲間の月のはれゆくをししばし待ちける郭公かな (二条院讃岐)

の三首があつて、それぞれかなり具象的な情景とそれに伴う情感とを詠んだ歌である。それに反して、新勅撰集において、「五月雨」を主題とした歌で「月」を詠み入れた唯一の歌である171の歌は、否定的な表現の効果をも發揮して、空漠かつ超然とした感じを出すはたらきをしており、夏部の構成に大きな変化を与えている。

さて、右記の(4)および(6)においてあげた特質の根底において、次

のことが言えると考える。

それは、新古今集・秋上・三六三の定家の歌、

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ(文治

二年・二見浦百首)

に關連してなど言われることである。かつて余情妖艶体を旨とした美の幻影を追い続ける傾向が強かった定家は、心の基底においては一つの「美に安住することができず」<sup>(1)</sup>「眼前にあるものにのめり込むことができず、そこになにもに心を走らせずにはいられず」<sup>(2)</sup>、「絶対的精神・宇宙的秩序を志向する」という姿勢があつたと考へる。そのような定家の姿勢が、新勅撰和歌集の撰集に當つて、右記の(4)・(6)の配列を作り上げたのであろう。

(7) 新しい風情の佳作の入集

従来勅撰集にはなかつた新しい主題の歌を採り入れていることについては(3)において述べた。次に、従来勅撰集にもあつた主題を詠んでいる歌で、新しい風情を表わしている佳作として、次の三つの歌をあげたい。

寛喜元年女御入内屏風

権中納言定家

143 ひさかたのかつらにかくるあふひぐさ空の光にいくよなるらん

題しらず

如願法師

186 あけぬるかこのまもりくる月かげの光もうすきせみのはごろも

みな月ばらへのところをよみ侍ける 後京極撰政前太政大臣

190 早き瀬の帰らぬ水にみそぎしてゆくとし波のなかばをぞしる

右の143の歌は、「あふひ」を主題とした歌三首の中の末尾に置かれてゐる。この歌は、月の桂にかけた「あふひ草」が大空の光の中

に枯れることなく、永く不変である様子を想像したものであって、幻想的で長高い歌でしかも賀の心をこめた歌になっている。そもそも「あふひ」を夏の景物として詠んだ歌を勅撰集に収めたのは「詞花集」が初めてあって、詞花1首、千載2首、新古今2首と採られているが、月の桂にかけた「あふひ草」を詠んだ歌は、この143の歌が初めてである。

次に、186の歌は、「夏月」を主題とした三首の歌の中の末尾に置かれている。この歌における「月かげの光もうすき」の「うすき」は、「光」と「せみのはごろも」との両方に掛かっているものであって、夏の夜の木の間をもれてくる月の薄い光が薄い蟬の羽衣はなえもにさしてきて、夜が明けたのであろうかと思うという、夢幻的な繊細な情調を伴う歌である。

この186の歌と、「建保四年後鳥羽院百首」における定家の、木の間も垣根に薄き三日月の影あらはるる夕顔の花（夏）との成立の前後関係が不明であるが、この二つの歌の風情に類似点がある。

なお、この186の歌は後の、  
続拾遺・夏・二一〇・為氏「折りはへて音に鳴きくらす蟬のはの夕日も薄き衣手のもり」

風雅・夏・四三二・伏見院「鳴く声も高き梢のせみのはの薄き日影に秋ぞちかづく」

に影響を与えているのであろう。

次に、190の歌は、六月彼の歌三首の中の初めに置かれている。この歌は、良経の「秋篠月清集」の中の「西洞隠士百首」の夏部に載

新勅撰和歌集における夏部の構成と特質

せられている。この百首の成立時について、久保田淳氏が「建久七年十一月二十五日の政変後、おそらく同八年以降正治初年までの成立と考えたい。」と述べておられる。それに基いて考えれば、類歌の、

千五百番歌合・夏・讃岐「早き瀬のみそぎに流すうきことは帰らぬ水にたぐへてぞ思ふ」

建保四年後鳥羽院百首・夏・定家「飛鳥川ゆくせの波にみそぎして早くぞ年のなかば過ぎぬる」

は、この190の歌の影響を受けたものと考えられる。

ちなみに、この歌の「帰らぬ水」の最初の用例は、管見によれば「康和二年四月二十八日宰相中将国信歌合」において「後朝」の題で詠んだ俊頼の、

契りありてわたりそめなば隅田川かへらぬ水の心ともがな  
であって、それに次ぐ用例が清輔朝臣集（新千載集の哀傷部にも所収）の、

妹背河かへらぬ水の別れ路は聞きわたるにも袖ぞぬれける  
である。そうして、新古今集の雑下の大僧正寛弁の、  
おいらくの月日はいとどはやせ川かへらぬ浪にぬるる袖かな  
との成立の前後関係は未詳である。

さて、六月彼の歌において、年月の過ぎゆくことを惜しむ気持ちを表現した歌には、千載集の夏部における俊成の、

いつとても惜しくやはあらぬ年月をみそぎに捨つる夏の暮かな  
があるが、新勅撰集の190の歌は、「帰らぬ水」「みそぎ」「ゆくとし波のなかば」を巧みに結びつけて、深い述懐の心を詠んだ歌とし

て、佳作とすることができるとであろう。

### 三

新古今集から新勅撰集への歌風の推移については、既に別稿<sup>(6)</sup>で触れた。この新勅撰集は、定家の晩年の好尚によって撰ばれたものであって、そこにはことばを過度に飾り立てた歌はないが、平明な表現を用いてしかもおむね情意の深いと思われる歌、換言すれば歌の内面(奥)から充実感の盛り上がっててくると思われる歌が多く撰ばれていると言うことができる。

新勅撰集は、新古今集に比べて、歌数の規模の縮小という企画に基づきながらも、二において述べたように、中心主題の設定のしかたや、その中心主題である時鳥の配列において従来の勅撰集にはなかったところの特色を出しており、また、主題の取捨選択、相反する風情の歌の並列、本歌・先行歌の詞の逆用、否定的表現の歌の効果的配置、新しい風情の佳作の取り入れというように、撰歌と構成とに大きな創意工夫を加えていることがうかがえるのである。

#### 〔注〕

- 1 久曾神昇氏、樋口芳麻呂氏校訂「新勅撰和歌集」(岩波文庫・昭36年)による。
- ・ 貞永元年(一二三二)十月を形式的奏覧日とし、天福二年(一二三四)六月を奏覧日とし、文暦二年(一二三五)三月を実質的完成日と考えておく。(岩波文庫、解題)
- 2 有吉保氏「新古今和歌集の研究・基盤と構成」二八一・二八二ページにおける岸上慎二氏「中世文学Ⅰ」からの引用によ

る。ただし、新古今集の歌の主題については、久保田淳氏「新古今和歌集全評釈、第二巻」によった。

- 3 片桐洋一氏「後撰和歌集の本性」国語国文、昭31・5
- 4 注2の久保田淳氏の著、五五ページ
- 5 八代集において、「時鳥」を主題とした歌で「さみだれ」を詠み込んだ歌は、古今集に2首、金葉集に1首、千載集に2首あるのみである。(新古今集においては「さみだれ」を主題とした歌十二首の中に「時鳥」を詠み込んだ歌が二首置かれている。)
- 6 橋本不美男氏「院政期の歌壇史研究」四三ページと七八ページ
- 7 日本古典全書「今鏡」においては、底本は「ま」であるが長本によって「さ」を採り、「たれぞ狭山の」という本文を採るとしてある。
- 8 拙稿「新勅撰和歌集における春歌の構成と特質」(拙著「新古今歌風とその周辺」所収)
- 9 拙稿「建保三年内大臣家百首における定家と家隆との歌」・「建保四年後鳥羽院百首における定家と家隆との歌」(ともに拙著「新古今歌風とその周辺」所収)
- 10 片野達郎氏・安井久善氏「校本洞院撰政家百首とその研究」
- 11 久保田淳氏「新古今和歌集全評釈、第三巻」一八九ページ
- 12 佐々木幸綱氏「中世の歌人たち」一〇〇ページ
- 13 藤平春男氏「院政期歌壇」国文学、昭50・6月、八四ページ
- 14 久保田淳氏「新古今歌人の研究」七四〇ページ

- 15 萩谷朴氏『平安朝歌合大成、五』による。  
16 注8に同じ。